

イギリス文学にみられるスポーツについて (2)  
C. Doyleの諸作品を手がかりとして

A study of sport appeared in English literature (2)  
with reference to the works of C. Doyle

山 田 岳 志  
Takeshi YAMADA

The aim of this study is to make clear the literary image of Athleticism in relation to the social structure from the late nineteenth century to the early twentieth century.

For this paper, the works of C. Doyle from 1887's to 1927's examined here. Literary works have been thought to be a useful means of asseeing of sport. Literature makes it possible to analyse contemporary society more realistically than by social science, because it tends to show the time and society more vividly by its free imagination. To explain sports through literature seems to be most suitable approach.

For this point of view, the image of Athleticism appeared in English literature from the late nineteenth century to the early twentieth century discussed in this paper, mainly concerning between the British Empire and boxing treated in the works of C. Doyle.

## 1. はじめに

文学作品の研究が伝統的文学研究から文化・社会的研究へと向かいつつあることが指摘されている。このことは、文学作品を自立した「対象物」として文化的社会学の一フィールドとして捉え、文学作品がそれ自体、社会と積極的に関わることによって意味をもつ、といった文学作品の社会的機能を強調するようなことが指摘されているように思われる。<sup>1)</sup> さて、「文学はたしかに一つの社会の表現である」とか「推理小説は時代の風俗を映し出すリアリズム小説としての性格をもつ」と言われるように、文学作品にみられる社会状況や人々のメンタリティといった時代像は、社会史や民衆文化の研究にとって実証的研究にも劣らぬ資料的価値があるように思われる。<sup>2)</sup> そこで本研究は19世紀末のイギリス社会におい

て新しい文学傾向となってくる推理・冒険小説を大衆文化の重要な側面として捉え、そこにみられるヘゲモニー装置としてのアスレティシズムがどのように描かれているのか、具体的には19世紀末から20世紀初期にかけて近代スポーツとして合理化されたボクシング<sup>3)</sup>と帝国主義的精神との関わりについて、C. Doyleの諸作品を拠り所としてテーマへのアプローチを試みる。

19世紀半ばのイギリス社会を退化・退廃と見立てていたC. キングズレーやT. ヒューズに代表される筋肉的キリスト教の思想的展開は、パブリック・スクールにアスレティシズムという固有のモラルとイデオロギーを成立させる契機をもたらした。しかし、J.A. マンガンも指摘するように「理想主義と詭弁、さらには便宜主義までも内包した」<sup>4)</sup> ような複雑な側面をもっていたアスレティシズムの性格は特殊イギリスの事情を反映するかたちで形成されてきた。村岡が指摘するように、アスレティシズムという教育イデオロギーによってパブリッ

ク・スクールで養成されてくる騎士道的ジェントルマン像は、対内的には身体的弱体化と道徳の低下、さらにはジェントルマンの文化的身分制の問題、対外的にはクリミア戦争からボア戦争にかけての帝国主義的気運のなかにあつて中産階級を中心とする義勇軍運動という社会的意識に支えられていた。<sup>5)</sup> つまり、ホブソンも指摘するようにアスレティズムは、「男性的キリスト教から帝国的キリスト教」<sup>6)</sup> にいたる過程で、植民地官僚としてのジェントルマンを支える教育イデオロギーとして発展していくのである。こうして帝国支配としての礎石となっていくアスレティズムにとって「政治的機関という大衆的教育」としての性格をもつ文学作品は<sup>7)</sup> それに奉仕するかたちで道徳的武装と帝国主義を支えるイデオロギーとして整備されていく。キプリングやハガード等<sup>8)</sup> による文学活動は帝国主義的気運と連動するかたちで作品の中に騎士道精神やスポーツを格好のテーマとしてとりあげていったのである。

本研究ではT.ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』がパブリック・スクールという教育制度の内を舞台としてアスレティズムを若いジェントルマンの行動規範として機能させようとしたのであれば、「ホームズ物語やその他に散在する素材の多くがその当時の文化や社会風俗を形成している」と指摘される<sup>9)</sup> C. Doyleの諸作品を拠り所として19世紀末から20世紀初期イギリス社会におけるアスレティズムを帝国主義の思想的支柱として機能させていく過程を検討していく。特にここでは、C. Doyle自身が最もイギリスらしいスポーツと考えていたボクシングについて、彼のそれに対する姿勢と帝国主義との関わりについて検討していく。そのために①C. Doyleのスポーツの知識、②ボクシングと帝国主義、そしてこれらを統合するかたちで③C. Doyleのスポーツ観を概観しながらC. Doyleの諸作品にみられるアスレティズムの意義を明らかにしたいと考えている。使用する資料は、“The Grow borough Edition of the Works of Sir Arthur Conan Doyle” vol. 24.である。

なお、本研究はイギリス文学作品にみられるスポーツ像を設定するための大雑把な予備的試みでもある。

## 2. C. Doyleを囲むスポーツ状況

帝国主義的要素を内包するホームズ物語やC. Doyleが強い愛着をもって書いたと言われる歴史小説の内で描かれたスポーツ風俗はスポーツ史研究にとっても貴重な資料を提供している。C. Doyle自身もパブリック・スクール（ストニーハースト校）時代から40歳代まであらゆるスポーツを実践したスポーツマンであつたし、また身体に対する関心も非常に高かつた。

.....which have taken up an appreciable part of my life, added greatly to its pleasure..... As one grows old one looks back at one's career in sport as a thing completed. Yet I have at least held on it as long as I could, for I played a hard match of Association football at forty-four, and I played cricket for ten years more.<sup>10)</sup>

とりわけ、C. Doyleとボクシングとの関係を如実に示してくれる“Rodney Stone”や“The Croxley Master”におけるボクシングについては知識以上に優れた体験者でもあつた。このようにC. Doyleのスポーツ愛好家傾向はイギリス帝国の存在という社会的・歴史的状况からみて、アスレティズムの洗礼を受けながら時代を生きた証しでもあつたと思われる。ここではC. Doyleの社会観、スポーツ観とも関連してくると思われる彼のスポーツに対する知識と19世紀末から20世紀初期におけるスポーツ状況を中心に考えていく。

but I was surprised when I was a prisoner in that country to observe how widespread was this feeling, and how much it filled the mind and the lives of the people. A horse that will run, a cock that will fight, a dog that will kill rats, a man that will box.....they would turn away from the Emperor in all his glory in order to look upon any of these. ....I could tell you many stories of English sport, for I saw much of it during the time that I was the guest of Lord Rufton.<sup>11)</sup>

ナポレオン軍のマルボ將軍をモデルとして書いたと言われるこの歴史小説はそのまゝ18世紀末から19世紀半ばにかけてのイギリス社会の描写でもあつたと言われる。

I had caught this spirit of sport from him. I would have laid my Hussars against his Dragoons had they been ours to pledge.<sup>12)</sup>

スポーツ史上この時代のイギリス社会において闘鶏、競馬、闘犬、熊掛け、プライズ・ファイトなどの伝統的なブラッディスポーツは19世紀半ばになって『合理的娯楽運動』が展開されてくるまで、パトロン・スポーツとして盛大に行われていた。<sup>13)</sup> C. Doyleの歴史小説が史実を基本とする姿勢で貫かれているところに資料的価値を見いだすとすればこの作品におけるスポーツ風俗の描写はスポーツ史研究にとって価値があると思われる。

The man whom I found myself facing was a wellbuilt, fresh-complexioned young fellow, with a frank, honest face and a slight, crisp, yellow moustache. He wore a very shiny top-hat and a neat suit of sober black, which made him look what he was ..... a smart young City man, of the class who have been labelled cockneys, but who give us our crack volunteer regiments, and who turn out more fine athletes and sportmen than any body of men in these isislands.<sup>14)</sup>

この作品中、事件の依頼主Mr.HallPycraftが19世紀半ばからイギリス社会のあらゆる分野でヘゲモニーを掌握していくようになる中産階級出身者の若手実業家であることは当然であろう。であればこの若い実業家はパブリック・スクール出身であり、そこで充分アスレティシズムの洗礼を受けたスポーツマンでもあった。ましてこの階級がすすんで帝国主義精神の持ち主でもあったことを思えば、義勇兵としての軍隊経験も当然であったと思われる。C. Doyleはパブリック・スクールの実体は勿論、彼らの進路に対しても充分な知識を持っていたのである。であれば、パブリック・スクールからオックス・ブリッジに至る過程までのアスレティシズムについての描写も、C. Doyleのスポーツに対する豊かな知識を披露する結果となっている。

The lower of the three is Gilchrist, a fine schloar and athlete, plays in the Rugby team and the criket team for the college, and got his Blue for the hurdles and the long jump. He is a fine, manly

fellow.<sup>15)</sup>

この作品の舞台は1895年である。事件の依頼主がホームズに友人、Gilchristを紹介する場面はC. Doyleのスポーツ知識が充分に生かされたかたちでスポーツ風俗の描写になっている。事実、クリケットは1827年から、ラグビーは1872年から、陸上競技は1864年からオックスフォードとケンブリッジとの対抗戦が開始されているのである。<sup>16)</sup> 又幅跳びに用いる運動用具についての知識についてもC. Doyleが当時のスポーツにいかにか精通していたかの証明でもあった。さらに、The Missing Three-Quarterにおけるスポーツ風俗の描写こそは、C. Doyleが19世紀のアスレティシズムの状況についていかにか豊かな知識の持ち主であったかを明示してくれる。作品中、事件の依頼主と失踪したGodfrey Stauntonはケンブリッジ大学のスポーツマンである。そして大学におけるラグビーの詳細な描写もさることながら、この時代のスポーツマンがいかにか英雄像としてのスポーツマンであったかもこの作品は教示してくれる。

Godfrey Staunton .....you've heard of him, of course? He's simply the hinge that the whole team turns on. I'd rather spare two from the pack, and have Godfrey for my three-quarter line. Whether it's passing, or tackling, or dribbling, there's no one to touch him, and then, he's got the head, and can hold us all together. What am I to do? That's what I ask you, Mr.Holmes. There's Moorhouse, first reserve, but he is trained as a half, and he always edges right in on to the scrum instead of keeping out on the touchline. He's a fine place-kick, it's true, but then he has no judgement, and he cant sprint for nuts. Why, Morton or Johnson, the Oxford fliers, could romp round him. Stevenson is fast enough, but he couldn't drop from the twenty-five line, and a three-quarter who can't either punt or drop isnt worth a place for pace alone. No, Holmes, we are done unless you can help me to find Godfrey Staunton.<sup>17)</sup>

この長い引用からラグビーの技術的なことは勿論のこと、それ以上に近代スポーツの資質としての

統率力、判断力、役割分担（チーム・ワーク）はまさに19世紀イギリス社会が求めている社会的資質でもあったが、C. Doyleはアスレティズムが社会的機能を果たすべく教育イデオロギーの一部になっていたことを理解していたし、彼の場合それを積極的に支持したのである。

“Why, Mr. Holmes, I thought you knew things,” said he. “I suppose, then, if you have never heard of Godfrey Staunton, you don't know Cyril Overton either?” Holmes shook his head good humouredly. “Great Scott!” cried the athlete. “Why, I was first reserve for England against Wales, and I've skippered the Varsity all this year. But that's nothing! I didn't think there was a soul in England who didn't know Godfrey Staunton, the crack three-quarter, Cambridge, Blackheath, and five International. Good Lord! Mr. Holmes, where have you lived?”<sup>18)</sup>

C. Doyleがホームズ物語を書き出したのが1886年であった。イギリスでラグビーが近代スポーツとして最初の国際試合を行ったのが1870年にイングランド対スコットランド戦であった。C. Doyleはこの作品が発表される以前の国際試合を体験したGodfrey Stauntonであれば、まさにそれは時代の英雄像として写ったのである。この英雄像としてのスポーツマンの存在すら知らなかったホームズは事件の依頼主にイギリス人として当然の知識すら持ち合わせていないことを批判されるのであるが、しかし、こうしたC. Doyleの描写の背景にはC. Doyleこそスポーツマンを時代的英雄像として描きたかった逆説的意図が込められていたように思われる。又、この場面は19世紀末のイギリス社会の求めていたものがカーライルの英雄像からスポーツマン的英雄像への転換期であったことも併せて教示してくれるのである。<sup>19)</sup> このThe Missing Three-Quarterこそは、C. Doyleが近代スポーツとしてのラグビーの知識を示してくれた作品であり、スポーツ史的にも価値ある作品の一つであると思われる。さて、C. Doyleの作品にみられるラグビーに関する描写は、アスレティズムと社会階級との結びつきをも明示してくれる。

“Yes, the local evening paper has an excellent account in its last edition. Oxford won by a goal and two tries. The last sentences of the description say:

“The defeat of the Light Blues may be entirely attributed to the unfortunate absence of the crack International, Godfrey Staunton, whose want was felt at every instant of the game. The lack of combination in the three-quarter line and their weakness both in attack and defence more than neutralized the efforts of a heavy and hard-working pack.”<sup>20)</sup>

ラグビー選手のジャージーは元来が騎士道の起源をもつと言われているが、スポーツにジャージーが採用されるようになるのは19世紀半ば頃からであり、T.ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』におけるラグビー試合ではまだ採用されていなかった。<sup>21)</sup> アスレティズムにみられるカラーのシステムに象徴されるスポーツの世界の階級制は、そのまま社会の階級構造でもあった。<sup>22)</sup> このようにC. Doyleがスポーツマンにとってジャージーのもつ意義にまでも言及したことは、彼のスポーツ知識が単に技術だけにとどまるものではなかった、という証明でもある。さて、C. Doyleのスポーツに対する知識で特筆されるべきはボクシングについてであろう。

I have said little, during these years spent in the quest of health, concerning my literary production. The chief book which I had written since *The Refugees* was a study of the Regency with its bucks and prizefighters. I had always a weakness for the old fighting men and for the lore of the prize-ring,.....<sup>23)</sup>

このように述べるC. Doyleであるが、彼の作品中舞台を摂政時代にとった歴史小説でボクシング小説と言われる“Rodney Stone”がある。この作品でC. Doyleは摂政時代のシンボルとしてのダンディ像を越えて英雄像に関わるボクシング論を展開していく。

He was a type and leader of a strange breed of

men which has vanished away from England…… the full……blooded, virile buck, exquisite in his dress, narrow in his thoughts, coarse in his amusements, and eccentric in his habit. They walk across the bright stage of English history with their finicky step, their preposterous cravats, their high callars, their dangling seals, and they vanish into those dark wings which there is no return. The world has outgrown them, and these is no place now for their strange fashions, their practical jokes, and carefully cultivated eccentricities. And yet behind this outer veiling of folly, with which they so carefully draped themselves, they were often men of strong character and robust personality. <sup>24)</sup>

この“Rodney Stone”で採用されていくのが、1814年の拳闘クラブのルールである。摂政時代はボクシングの黄金時代でもあった。

“Well, he has the name of being a dangerous man. He is about the most daredevil rider in England……second in the Grand National a few years back. He is one of those men who have overshot their true generation. He should have been a buck in the days of the Regency ………a boxer, an athlete, a plunger on the turf, a lover of fair ladies, and, by all account, so far down Queer Street that he may never find his way back again.” <sup>25)</sup>

摂政時代のジェントルマンといえば狩猟家として、競馬馬の馬主として、アマチュアのボクサーとして、さらには血気さかんな伊達男という資質が条件であった。<sup>26)</sup> このように19世紀初期のジェントルマン像にはダンディな側面があったが、しかし強い性格をもつジェントルマン像もあった。<sup>27)</sup> C. Doyleはこうしたジェントルマン像の性格を見事に描写している。

Especially, he said, they still talked over my boxing match with the Honourable Baldock. It came about in this way. Of an evening many sportmen would assemble at the house of Lord Ruton, where they would drink much wine, make

wild bets, and talk of their horses and their foxes. How well I remember those strange creatures.…… They were of the same stamp all of them, drinkers, madcaps, fighters, gamblers, full of strange caprices and extraordinary whims. Yet they were kindly fellows in their rough fashion, save only this Baldock, a fat man, who prided himself on his skill at the box-fight. <sup>28)</sup>

こうした場面、つまりジェラルド准将が見た光景こそ19世紀初期ジェントルマンの生活習慣でもあったと思われる。さて、C. Doyleが公人としてポーア戦争に出かけたり、あるいは文学作家として、又歴史小説家として活躍した時代はアスレティズムがゲーム崇拜の域に達し、帝国主義的精神を支えるイデオロギーの一部となり、特に若いジェントルマンに明確な目的志向性を与える教育イデオロギーとなっていた。<sup>29)</sup> こうした社会的状況を反映するかたちでC. Doyleのスポーツ知識は植民地での状況をも教示してくれる。

“I have not introduced you yet,” said Holmes. “This, gentlemen, is Colonel Sebastian Moran, once of Her Majesty’s Indian Army, and the best heavy-game shot that our Eastern Empire has ever produced. I believe I am correct, Colonel, in saying that your bag of tigers still remains unrivalled?” <sup>30)</sup>

しかしながら、ヴィクトリア朝的美徳の擁護者でもあったC. DoyleはThe Missing Three-Quarterにおいてスポーツの世紀末的現象をも見逃していなかったのである。

“You live in a different world to me, Mr. Overton ………a sweeter and healthier one. My ramifications stretch out into many sections of society, but never, I am happy to say, into amateur sport, which is the best and soundest thing in England. However, your unexpected visit this morning shows me that even in that world of fresh air and fair play, there may be work for me to do. <sup>31)</sup>

さて、これまでC.Doyleのスポーツに対する知識の概観を試みた。それは19世紀初期から20世紀初期にかけて、下層階級から上層階級に至るまでのスポーツの状況であった。このことはC. Doyleのスポーツに対する知識が階級に偏しない幅広いものであったことを物語っていた。特に歴史小説との関わりでボクシングに対する知識は、彼の歴史観、社会観を支える重要な要素になっていく。

### 3. C. Doyleと帝国主義

19世紀のミュージック・ホールが大英帝国を支えるジンゴイズムのメディアとしての側面をもつとすれば、サバタリアン・ムーブメントの俗化は大衆スポーツへの道を切り開いていく契機になった。<sup>32)</sup> こうして大衆文化としてのミュージック・ホール、大衆スポーツ、そしてパブリック・スクールにおけるアスレティズムは1897年のダイヤモンド・ジュビリーにおいて大英帝国の一体性を鼓舞する道具として機能していったのである。C. Doyle自身も、当時の国民のほとんどが帝国主義的精神の持ち主であったとこを指摘しているように、ミュージック・ホールでのジンゴ・ソングや『パンチ誌』等によって帝国主義の社会が擁護されていくことを感知していたと思われる。そしてC. Doyleはこうした社会状況のなかから歴史小説、冒険・推理小説を通して時代精神を擁護していくのである。

we were a patriotic crowd, and our little pulse beat time with the heart of the nation. I am told that the average of V.C.'s and D.S.O.'s now held by old Stonyhurst boys is very high as compared with other schools.<sup>33)</sup>

ここでは、C.Doyleが体験したボーア戦争から第一次世界大戦にかけてのイギリス社会と、C. Doyle自身にとってこの両戦争がどのような意味を持っていたのかを考えてみる。

The early Boer victories surprised no one who knew something of South African history, and they made it clear to every man in England that it

was not a wine glass but a rifle which one must grasp if the health of the Empire was to be honoured.<sup>34)</sup>

C. Doyleは自らボーア戦争への志願兵として、40歳という年齢で応募したがすぐには採用されず、結果的には友人、ジョン・ラングマンが計画した野戦病院の補助的医員兼総監督という立場で南アフリカへ渡ることになる。このボーア戦争における思考・行動がC. Doyleの戦争に対する姿勢であったと言われる。このボーア戦争の起こりは、イギリスの植民地帝国主義的動機によるものであったが、戦争もスポーツ的感觉で捉えていたC. Doyleの行動原理は、ジンゴイズムの風潮に同調して帝国主義を支えたのである。しかし、ボーア戦争はイギリスの国際的孤立化を招くと同時に、国内的には新たな社会問題、つまり階級的矛盾をさらけ出すことになっていった。それは労働者階級の道徳的退廃から生じた身体の弱体化という問題であった。「ボーア戦争時は、それまでしばしば社会主義者たちが強調してきた人民大衆の身体的健康状態の悪さが、一般の認めるところとなってきた。1893年から1910年の間の医学的検査を受けた70万人の新兵の3分の1以上が軍務に服するのに適しないと判断されたが、徴兵検査官は、もっと多くの若者が検査そのものさえ受ける身体的条件を具えていないとして、兵役から除外する者の割合を60%という高さにした。」<sup>35)</sup> こうした認識はイギリスの学校教育に大きな影響を与えた。伝統的にイギリスは志願兵、義勇軍制度によって国防が支えられていたが、マンチェスターをはじめ工業地域での大量の徴兵不合格者が公表されると、貧困と保健状態の悪化の問題はイギリス国民の身体的退化現象に注がれるようになった。<sup>36)</sup> また、国民の身体的退化を道徳的退廃と結びつける傾向にあって、「『男らしいクリスチャン』という理想や、人格の形成のためのスポーツという観念がパブリック・スクールから公立学校に移植され、規律や勇気や忠誠心といった徳目の育成をめざして、勝ち負けを重視する集団競技が急速に普及しはじめた。帝国主義の浸透は、ときどきあからさまに軍事的な形態をとる。小学児童を対象とするライフル射撃クラブや学生軍事教練団などの設置が、その一例」であった。<sup>37)</sup> こうしてイギリ

スにおける学校教育は、身体的向上という側面を強調しながら、ホブソンが指摘するように「愛国心を装う帝国主義のための学校制度」が展開されていった。<sup>38)</sup> C. Doyleの作品には直接帝国主義と教育について言及しているところはない。しかし、彼の自伝の中で国会議員に立候補した理由をボクシングの用語を比喩的に駆使しながら国防論を展開しているのである。

for though I was a good deal of a Radical myself in many ways, I knew that it would be a national disgrace and possibly an imperial disaster if we did not carry the Boer War to complete success, and that was the real issue before the electors. <sup>39)</sup>

このように選挙民に訴えることがC. Doyleの立候補の真意であり、彼の社会観でもあった。そして国家防衛、帝国存続の必要性を説いていくのである。彼の自伝によれば、C. Doyleの社会観はまさに帝国主義的社会を支える精神であったと思われる。こうして、帝国主義的精神の持ち主としてC. Doyleはボーア戦争後も彼独自の国防改革論を展開していく。

……but my feelings had been aroused by the conviction that the life of our men, and even the honour of our country, had been jeopardized by the conservatism of the military, and that it would so happen again unless more modern views prevailed. <sup>40)</sup>

The sad fact is that officialdom in England stands solid together, and that when you are forced to attack it you need not expect justice, but rather that you are up against an unavowed trade union the member of which are not going to act the blackleg to each other, and which subordinates the public interest to a false idea of loyalty. <sup>41)</sup>

C. Doyleによるこうした批判は、階級社会の構造をそのまま反映している軍事的機構に対する批判であった。そして大英帝国の存在を肯定するC. Doyleは近代戦争における兵器の改良とともに、国民の総力戦としての可能性をも示唆した提案をしていくのである。<sup>42)</sup> このようにC. Doyleはホブソ

ンが指摘するように帝国の存在を侵略行為とみるよりも大英帝国を肯定する社会観を打ち立てていく。

I told the Canadians of our magnificent Boy Scout movement, and also of the movement of old soldiers to form a national guard. "A country where both the old and the young can start new, unselfish, patriotic movement is a live country," I said "and if we are tested we will prove just as good as ever our fathers were." I did not dream how near the test would be, how hard it would press, or how gloriously it would be met. <sup>43)</sup>

C. Doyleにとって帝国主義的精神を支える道具はボーイ・スカウト運動であったり、スポーツであった。

#### 4. C. Doyleとボクシング

C. Doyleは『回想と冒険』の中で、スポーツこそは愛国主義精神を支える最良の道具である、と述べている。なかでもボクシングについてはホームズ物語や歴史小説の中でおおきな比重を占めている。彼の作品の中からいくつかの引用を挙げてみる。

I had already received some boxing lessons before leaving London, so it seemed to me that if I should chance to meet some traveller whose size and age seemed such as to encourage the venture I would ask him to strip off his coat and settle any differences which we could find in the old English fashion. <sup>44)</sup>

I have always been keen upon the noble English sport of boxing, and, though of no particular class myself, I suppose I might describe my form as that of a fair average amateur. I should have been a better man had I taught less and learned more, but after my first tuition I had few chances of professional teaching. However, I have done a good deal of mixed boxing among many different

types of men, and had as much pleasure from it as from any form of sport. <sup>45)</sup>

C. Doyleのボクシングに対する知識、体験は特筆されるものであろう。それにC. Doyleのボクシングに対する姿勢はイデオロギーとしてのボクシングでもあったと思われる。C. Doyleのボクシングについての知識は、“Rodney Stone”を書くにあたって懸賞ボクシングに関する知識はピアス・イーガンの『ボクシアーナ』や、ヘンリー・ダウンズ・マイルズの『ピュージリスティカ』から求めていたと言われている。<sup>46)</sup> C. Doyleはボクシング小説を書く時、ボクシングの正確な歴史を把握してから臨んだのである。<sup>47)</sup> そしてボクシング小説、“Rodney Stone”における彼のスポーツ観はそのままC. Doyleの歴史観でもあったと思われる。この“Rodney Stone”では摂政時代が設定されている。この時代の特徴は、モラルの低下、華美志向、ダンディの時代といわれ、摂政時代のジェントルマン像といえば「ボクサー、スポーツマン、賭けの花形」としてのダンディ像であった。しかし、C. Doyleは時代の負性としてのこのダンディ像をボクシングを通して時代の英雄像へと転化させていく。その過程でボクシングはC. Doyleにとってイデオロギーとなっていく。ではC. Doyleはなぜ摂政時代のボクシングを強調していくのか。19世紀初期はボクシングにとって黄金時代であったと言われる。ジェームス・フッグによる拳闘術、剣術、棒術を教える学校の設立は、やがてピュージリストと称される職業拳闘家を生み出すようになり、やがてはパトロン・スポーツとして発展していった、と言われている。<sup>48)</sup>

I have never concealed my opinion that the old prize-ring was an excellent thing from a national point of view ……exactly as glove-fighting is now. Better that our sports should be a little too rough than that we should run a risk of effeminacy. But the ring outlasted its time. <sup>49)</sup>

C. Doyleがボクシングについて語る時、それは懸賞ボクシングであった。しかし、スポーツ史研究が教示してくれるように懸賞ボクシングはblood sportとして批判されてきたものであるが、

しかし、パトロン・スポーツには家父長社会を支える社会的装置としての機能を果たしていた側面もあった。<sup>50)</sup> こうしたパトロン・スポーツのもつ性格が1814年にはロンドンに“ThePuglistic Club”が結成されるなどして、懸賞ボクシングは盛況をきわめたのである。確かにジャック・プロートンによる《プロートン・コード》と呼ばれるルールが設けられたとは言え、懸賞ボクシングには賭博性が非常に強かったのである。そのために不正、八百長試合が仕組まれることも多々あったことも事実であった。C. Doyleはボクシングの知識として、こうした19世紀初期の社会状況も充分把握していたように思われる。“ジェラール物”と言われる彼の作品の中にもこうした状況を描写しているところが散在するのである。

……………If this knee dont get well before Wednesday, theyll have it that you fought a cross, and a pretty job youll have next time you look for a backer. ” <sup>51)</sup>

“Fought a cross !” growled the other. “Ive won nineteen battkes, and no man ever so much as dared to say the word ‘cross’ in my hearin’ ” <sup>52)</sup>

C. Doyleのボクシングに対する知識は正確に19世紀初期のボクシング史を準っているのである。さて、パトロン・スポーツとしての懸賞ボクシングは伊達男のジェントルマンによって支えられていたが、これは元来流血を覚悟で素手で闘う荒々しいスポーツであった。C. Doyleは古い時代の荒々しい様相を活写する道具としてボクシングを称賛するが、その目的はボクシングがもつ側面、「男らしさ、勇気、忍耐」といったものが伝統的価値観と合致する、まさにイギリス的スポーツと見ていたからであろう。<sup>53)</sup> このようにC. Doyleにとってボクシングこそはイギリスの伝統的価値観を支える道具であり、彼のボクシング小説、“Rodney Stone”もこうした観点からの指摘であったように思われる。

for good or evil, the love of the ring was confined to no class, but was a national peculiarity deeply seated in the English nature, and a common



heritage of the young aristocrat in his drag and of thorough costers sitting six deep in their pony cart. <sup>54)</sup>

The ale-drinking, the rude good-fellowship, the heartiness, the laughter at discomforts, the craving to see the fight ……………all these may be set down as vulgar and trivial by those to whom they are distasteful; but to me, listening to the far-off and uncertain echoes of distant past, they seem to have been the very bones upon which much that is most solid and virile in this ancient race was moulded. <sup>55)</sup>

さて、C. Doyleのボクシングへの傾注は時代的条件とも関係していたように思われる。そこで彼のボクシングへの賛美は帝国主義的精神と結びついていくようになる。C. Doyleにとってボクシングは兵士に敢闘精神や積極的な行動を支える道具であり、イギリス社会がボーア戦争から第一次世界大戦へと、その帝国主義的気運を高めていく過程でボクシングと愛国精神を結びつけていったのである。

After the Great War, one can see that those of us who worked for the revival of boxing wrought better than we knew, for at the supreme test of all time……………the test which has settled the history of the future ……………it has played a marked part. <sup>56)</sup>

ホブソンは、「一般大衆のためには、英雄崇拜と人目をそばだてるような栄誉、冒険と競技精神に対するより粗野な訴え、即ち闘争本能を直接的に刺戟するために粗野なけばけばしい色彩で変造された現代史がある」<sup>57)</sup>と指摘したが、それとは対象的にC. Doyleは愛国的精神を支えるアスレティズムとしてのボクシングは、男性的キリスト教徒を帝國的キリスト教徒へと橋渡ししていく奉仕としての道具と見立てていったように思われる。

……………that war is a game which is played under fixed rules, …………… <sup>58)</sup>

戦争すらスポーツ的感覚で捉えていたC. Doyleにとって、ボクシングによって養成される果敢な精神、フェアなプレーこそは帝国主義を支える精神的条件であった。ホブソンが攻撃的な帝国主義の原動力とみなしていた闘争と支配という原始的欲望は、C. Doyleにとっては帝国主義的精神を鼓舞する道具として見立てられていく。下記の引用からもみて、C. Doyleはボクシングを愛国的精神との関わりで論じているのである。

……………, these men still gilded their harsh and hopeless lives by their devotion to sport. It was their one relief, the only thing which could distract their mind from sordid surroundings, and give them an interest beyond the blackened circle which inclosed them. Literature, art, science, all these things were beyond the horizon; but the race, the football match, the cricket, the fight, these were things which they could understand, which they could speculate upon in advance and comment upon afterwards. Sometimes brutal, sometimes grotesque, the love of sport is still one of the great agencies which make for the happiness of our people. It lies very deeply in the springs of our nature, and when it has been educated out, a higher, more refined nature may be left, but it will not be of that robust British type which has left its mark so deeply on the world. Every one of these ruddled workers slouching with his dog at his heels to see something of the fight, was a true unit of his race. <sup>59)</sup>

## おわりに

イギリス・スポーツ史が教示してくれるところによれば、*「ピューリタニズム」*としての性格をもつボクシングが大きく改革されてくるのが撰政時代といわれる19世紀初期であった。イングランドにおける懸賞拳闘試合の初代チャンピオンのフィグは、ボクシングを“高貴な者の防衛術”として伊達男達の若いジェントルマンの師範となってボクシングを形成し、又、フィグの弟子プロートンは1743年にボクシング史上ではじめてのルー

ルの明文化をはかると同時に、1747年《マフラーズ》と称するグローブを導入した。これらの主たる目的は、上流階級の子弟の自己防衛の技芸としてであったと言われる。<sup>60)</sup> 摂政時代はパトロン・スポーツとしてのボクシングが盛んにおこなわれていた。C. Doyleにしても、この時代のボクシングに関する描写は得意である。

…………… Rufton, they can't hurt each other if they wear the mawleys," cried Lord Sadler. And so it was agreed. What the mawleys were I did not know, but presently they brought out four great puddings of leather, not unlike a fencing glove, but larger.<sup>61)</sup>

C. Doyleは摂政時代のスパリーングを正確に準っているのである。そして、“Rodney Stone”もこうした世界を活写したボクシング小説であった。

さて、C. Doyleは歴史小説、ホームズ物語を通してボクシングを擁護してきた。富山によれば、C. Doyleにとってボクシングは自己の境遇から脱却するための身振りであったと指摘している。<sup>62)</sup> さらに19世紀末から20世紀初期にかけての推理・冒険小説は、まさに社会現象と言われるように読者を魅了していくようになるが、世紀末文学としての大衆文学にはスポーツに期待されるものを社会的要求とみなして、それらの作品の中にスポーツ風俗を取り入れていき、時代的精神を代弁した傾向があったように思われる。であれば、C. Doyleもその代表者に加わることが出来る資格を十分に持ち合わせていた、ということができよう。

\*本研究は、平成7年度基礎教育系の研究費（重点配分）の援助を受けました。

### 引用・参考文献

1. 川口 喬：文学の文化研究、P. 3、研究社出版、東京、1995。
2. 島田 謹二：ルイ・カザミアンの英国研究、P.25。白水社、東京、1990。  
垂水 節子：JUSTICA、② p. 360~361、ミネルヴァ書房、京都、1991。
3. 松井 良明：19世紀イギリスのボクシングにおけるスパリーングの果たした歴史的意義に

ついて、スポーツ史研究、第3号、p. 12、1991。

4. J.A.Mangan: Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School, P.9 Cambridge, Univ.Press. 1981.
5. 村岡 健、鈴木利章、北川 稔、：ジェントルマン、その周辺とイギリス近代、P. 232、ミネルヴァ書房、京都、1987。
6. J.Aホブソン（矢内原忠雄訳）：帝国主義論、下巻、P. 129。岩波文庫、東京、1976。
7. J.Aホブソン（矢内原忠雄訳）：前掲書、P. 128。
8. P.コースティアス、J.Pプチ、J.レイモン（小池滋、白田 昭訳）：19世紀イギリス小説、P. 112、南雲堂、東京、1986。
9. H.R.F.キーティング（小林司、東山あかね、加藤祐子訳）：世紀末とその生涯、P. 25、
10. C.Doyle：The Crowough edition, vol. X X I V, "Memories and Adventures," P.299. The Country Life Press, New York. 1920. (以下、C. Doyleの引用文に関してはタイトルと頁数のみを記す。)
11. C. Doyle："How the Briga," P. 92.
12. C. Doyle："Exploits of Brigadier GERARD," P. 225.
13. P.Bailly："Leisure and Class in Victorian England, Rational Recreation, 1830—1885, P.16. Toronto, Univ, Press. 1987.
14. C. Doyle：The Stock-Broker's Clerk, P.53~54.
15. C. Doyle：Adventure of the Three Students, P.221.
16. 寺嶋善一：イギリスのスポーツ『最新スポーツ辞典』P. 70、大修館、東京、1987。
17. C. Doyle：The Missing Three-Quarter, P.261~232.
18. C. Doyle：op.cit., P.262.
19. 富山太佳夫：シャーロック・ホームズの世紀末、P.211。青土社、東京、1993。
20. C. Doyle：op. cit., P.279.
21. M、ジルアード（高宮利行、不破有理訳）：騎士道とジェントルマン、P.239。三省堂、東京、1990。
22. 小石原美保：学校小説の中のアスレティズム、体育の科学、vol, 43, 6. P.442。東京、1990。

23. C. Doyle : *Memories and Adventures* , P.159.
24. C. Doyle : *Rodney Stone*, P.294.
25. C. Doyle : *Shoscombe Old Place*, P.428.
26. P.メイソン (金谷展雄訳) : *英国の紳士*, P.117. 晶文社、東京、1991.
27. 富山太佳夫 : 前掲書、 P.206.
28. C. Doyle : *The Adventures of GERARD*, P.95.
29. 村岡 健、鈴木利章、北川 稔、 前掲書、 P.259.
30. C. Doyle : *Adventure of The Empty House*, P.19.
31. C. Doyle : *op. cit.*, P.262.
32. 村岡 健、木畑洋一 : *イギリス史. 3—現代世界歴史体系—* P.119. 山川出版、東京、1990.
33. C. Doyle : *op. cit.*, P.11.
34. C. DOyle : *op. cit.*, P.167.
35. B.サイモン (成田克矢訳) : *イギリス教育史*, II P.213. 亜紀書房、東京、1980.
36. P.C. マッキントッシュ (加藤橋夫、田中鎮雄訳) : *イギリス体育史*, P.112、*ベースボールマガジン社*、東京、1983.
37. S. ハンプリーズ (山田 潤、P.ビリグズリー、呉 宏明訳) : *大英帝国の子どもたち*, P.66. 柘植書房、東京、1990.
38. S. フンフリーズ (山田 潤、P.ビリグズリー、呉 宏明訳) : 前掲書、 P.252.
39. C. Doyle : *op. cit.*, P.223.
40. C. Doyle : *op. cit.*, P.237.
41. C. Doyle : *op. cit.*, P.244.
42. 富山孝夫 : 前掲書、 P.298.
43. C. DOyle : *op. cit.*, P.345.
44. C. Doyle : *Borrowed Scences*, P.333.
45. C. Doyle : *The Yellow Face*, P.30.
46. C. Doyle : *op. cit.*, P.303.
47. H.D, mile : *Puglistica ; History of British Boxing*, Edinburgh, 1902.
48. 富山太佳夫 : 前掲書、 P.203.
49. 松井良明 : *規範としての文化、『文化総合の近代史』*, P.173、平凡社、東京、1990.
50. C. Doyle : *op. cit.*, P.304.
51. 松井良明 : 前掲書、 P.474.
52. C. Doyle : *op. cit.*, P. 250.
53. C. DOyle : *op. cit.*, P.251.
54. C. Doyle : *op. cit.*, P.488.
55. C. Doyle : *op. cit.*, P.251.
56. C. Doyle : *op. cit.*, P.252.
57. C. Doyle : *op. cit.*, P.306.
58. J, A, ホブソン (矢内原忠雄訳) : 前掲書、 P. 135.
59. C. Doyle : *op. cit.*, P.223.
60. C. Doyle : *The Croxley Master*, P.347.
61. 石川 輝 : *ボクシングの歴史『最新スポーツ大辞典』* P.1178. 大修館、東京、1987.
62. C. Doyle : *op. cit.*, P.96.
63. 富山太佳夫 : 前掲書、 P. 211.

本研究が、上記の文献に依拠しながら展開されていることを付記しておく。

(受理 平成9年3月21日)